

小金井雑学大学

第30号 令和5年3月

だより

コロナ禍で生涯学習を思う

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐 京子

新型コロナウイルス感染症で一変した生活も、ようやく元の日常に戻ろうかという雰囲気になってきました。今は感染も減少傾向ですが、また増加に転じないとも限らない、不安な状態ではありますが、それでも元の日常への希望も見えて来たこの頃です。と言っても本当には元の生活には戻らない、と思う理由の一つがこの間他人との密を避けるために推奨されてきたスマホやパソコンを使っての生活です。支払いも人の手に触れることのないスマホ決済や電子決済が進められ、会議も人に会わずにオンラインで、と高齢者もスマホやパソコンに振り回されての丸3年になります。何とかやれるようにと思いながらも、なかなかうまく出来ずに行ったり来たりの日々が今も続いています。できれば、この機械に振り回されずに人生を終わりたいとどこかで思っていたのが、コロナのせいでそうも言えなくなってしまいました。まさに、ここに生涯学習があります。しかも、生活するために必要な道具を使えるようにするための学習です。小金井雑学大学での学習は楽しみながら学ぶを第一にして参加していただきたいと思っていますが、この道具を使えるようになるのは、生活するためなので、苦痛も伴います。しかし、避けられない・・・。たまに、何でも聞けそうな若い方に会うと、恥も外聞も無く、聞かぬは一生の恥とばかりに聞いてしまいます。



子供たちも、一人一台のタブレットを学校で貸与され、この道具で学んでいますから、老いも若きも必死には違いありませんが、子どもの方が身につくのは早いのは自明の理。きっと楽しんで学んでいるでしょう。いずれにしろ、時代の大きな変化が急にやってきたことを感じざるを得ません。

時代と共に覚えることが変わるといふ学びも、変わらぬ真理を知るために過去を学び今と比べるといふ学びも、生涯ついて回る学びのようです。昨今は、人生が永くなり、学び直して新しい仕事につくことも当たり前になりました。様々な学びと共に人生を豊かにしてまいりましょう。

武蔵野の原風景こもれびの里へ行ってみませんか

こもれびの里コーディネーター 豊泉 喜一

立川市に在る国営昭和記念公園の中に「こもれびの里」があるのをご存じでしょうか。ここは都市開発が急激に進み、消えて行く武蔵野の心象風景を残そうと、国営昭和記念公園に開設された区域です。昭和 52 年（1977）に立川飛行場が全面返還された時、跡地利用について地元をはじめ各方面から様々な提案がなされ、結局昭和天皇在位五十年記念事業として、国営昭和記念公園の建設と広域防災基地を中心とした利用計画案が決まり、昭和 58 年（1983）10 月 26 日に昭和記念公園は開園しました。



その公園の中に、昭和 30 年代の武蔵野の心象風景を再現するため、平成 12 年から基本計画を開始、平成 13 年にはこもれびの里懇談会が設置され、明治大学農学部倉本宣教授を始め関連する学識経験者と共に、私は立川民俗の会の三田鶴吉会長から、地元有識者としてお誘いを受け、この懇談会に参加しました。

公園内のこもれびの里に予定されていた地区は、多摩ニュータウンの造成工事や、下水道工事の残土などを積み上げた一面の荒地でした。公園側からは重機を使って開墾の話もありましたが、この武蔵野は機械など無い時代に、私たちの祖先が一鍬一鍬手作業で開拓した土地なので、私はそれに倣い何とか手作業で開拓したいと提案しました。その提案が取り入れられ、平成 14 年 9 月 13 日から市民ボランティアの手で開拓が始まりました。しかし現地は雑草が生い茂り、休憩する日陰も、水もトイレもなく、大変な重労働でしたが、それにもめげず開拓は着々と進み、その秋には開拓した場所に最初の麦播きが出来ました。

それから 2 年間ボランティアの皆さんの努力が実り、約 2000 平方メートルの畑と、水田の開墾が終了、そこに昭和 30 年時代に武蔵野の各地域で作付けされていた、麦、陸稲、サツマイモ、ジャガイモを中心とした畑作物の栽培が始まり、今でも春夏秋冬機械を使わず、ボランティアの手作業で農作業が続けられています。

平成 22 年から 24 年にかけて、江戸時代名主であった狛江市石井家の、母屋土蔵長屋門が、復元移築され、囲炉裏では毎日火が焚かれ、水車小屋も出来てのどかに水車が回り、こもれびの里に武蔵野の心象風景が再現されました。そして現在ではほとんど行なわれなくなった、季節折々の年中行事なども行っています。その他里の春祭りや冬まつり、そして秋には収穫祭、芋掘り、落花生の収穫体験など 1 年を通じて様々な催しがあります。

こもれびの里は昨年開設 20 周年を迎えました。ボランティアの手で開拓され、ボランティアが運営管理しているこもれびの里へ、機会がありましたら、是非お越しください。



塗香ずこうについて

三光院住職 小泉 倅祥尼こうしょう

塗香とは心と身体を清める事ができる粉末のお香です。リラックス効果とストレス緩和や集中力アップ等の効果があります。神社等に行きますと手水舎があり、口をすすいで手を洗い、参拝する前に自身を清めます。お寺では読経の前や写経を行う前に手のヒラにお香をひとつまみ、そして耳の後や手首のリンパの流れる場所にすり込み、邪気を払います。お線香も同じ香木から作られていますが、香木には多くの種類があります。



白檀びやくだん（サンダルウッド） 桂皮けいひ（シナモン） 沈香じんこう（沈丁花の樹木） 等々…。

インドではガンジス川に遺体を流すのが通例でありましたが、二千五百年前、お釈迦様が亡くなられた時多くの弟子達は涙にくれ、お釈迦様の骨を持ち帰りたいと言い出してインド中の白檀の香木を集め、火葬されたと伝わっています。


弟子達に分けられた骨からは白檀の香りが漂い、弟子達はその白檀の香りからお釈迦様の存在を感じ、守られていると思ったそうです。白檀の香りと仏教と深いかわりがあるのはその為です。

そして、そのうちに自分達もお釈迦様のように白檀で火葬されたいと考える弟子達が大変高価な白檀を手に入れる為には、お金を持ちより香木を買う習慣が出来、それが今の「お香典」になったと伝わっています。

理事・講師募集

小金井雑学大学は、講師も基本的にはボランティアでお願いしており、市民同士の学びあいを基本に考えて運営しています。こうした生涯学習の市民活動にご関心のある方を募集しております。一緒に学びの場作りをしませんか。

「小金井雑学大学だより」のバックナンバー（カラー）は小金井雑学大学のWEBサイトでお読みいただけます。

小金井雑学大学 



食文化史をめぐって

女子栄養大学生涯学習講師

食物史・食文化研究家・栄養士 今川 香代子

「パンの木ってどんな木？ どんな実がなるの？」

それが私の食文化への勉強の始まりでした。当時食文化に関する講座を持つ大学もなく、ひたすら自分で資料を集めながらの暗中模索の連続でした。

結婚し、子育てや親を介護し看取り、60代でやっと自分の時間が持てるようになり、再び大学で学び直しました。

その後、独学で学んだ食文化を大学で講義することができ、10年を過ごした所です。長い道のりでしたが、幾つになっても、何でもやれば出来ると意を強くした所です。

食文化という言葉は、今や一般的になりました。食べ歩きや、郷土食、古代食など、幅広く使われていますが、古代ギリシャ世界から現代まで、大きな流れについて研究している人はほとんどありません。歴史、地理、民族、宗教も全てが含まれるからです。

そんな中で、古代ギリシャ・ローマから、中世イギリスの食文化、アメリカの食物誌を書き上げました。最後に残ったのが、イスラムです。

特にイスラムの食文化に関する資料は見当たりません。最もアラビア語が読めればあるかも知れませんが……。そこで取り上げたのが「千夜一夜物語」でした。この本には当時の生活様式や食の様子がよく描かれています。

7～8世紀のバグダードは平安の都、華の都として世界で最も栄えた都です。美術、工芸、織物、医学、食養生、食べ物も甘いお菓子も発達していました。

こうした文化がシルクロードを経て中国へ、そして遣唐使を通じて日本に伝えられ、ペルシャからの品々が多く正倉院に保存されました。イスラム文化は、平安時代の日本に大きな影響を与えたに違いありません。

食べ物でも、胡瓜、胡麻、胡桃、胡椒、胡蒜（にんにく）などは、ペルシャから中国を経て日本に伝えられたものです。



編集後記

雑学だより第30号をお届けします。

今回は三光院住職の小泉さん、玉川上水のお話の豊泉さん、そしてイスラムの生活と文化のお話の今川さんに原稿をお願いしました。お忙しい中ありがとうございました。雑学大学再開後も多くの受講生に出席いただいております。ぜひ皆様もお越しください。

事務局 田中 留美子

発行責任者 五十嵐京子